様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２１１８

研究課題名（和文）常識哲学と可謬主義の展開に関する研究

研究課題名（英文）Study on a Common Sense philosophy and fallibilism

研究代表者
戸田　剛文（TODA, TAKEFUMI）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：３０４０２７４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：１９世紀以降大きな影響力を持つようになったプラグマティズムや科学哲学者カール・ポパーなどにみられる可謬主義哲学は、「常識」に高い認識論的な地位を与えることも一つの特徴としているが、こういった哲学的立場が、近代哲学からどのような影響を受け、どのように近代哲学と類似した構造を持っているのかという点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
われわれにとって知識というものは、特に科学的知識に代表されるように、世界のありかたを理解する重要な手がかりとして考えられており、社会においても非常に重視されているものである。しかし、そのちしきがそもそもどのようなものであるのかということは、常に問われつづけられなければならない。知識・真理という概念がどのように歴史的に影響関係を持ちつつ変化しているのかを明らかにすることで、現代において知識というものをどのようなものとして捉えることができるのかという考察の手がかりとなる。

研究成果の概要（英文）：Fallibilism attracted many philosopher. For example, pragmatists or Karl Popper. We cannot deny that they are very important philosophers in 20th century. And these philosophers who accept fallibilism often give a very important role to common sense in epistemology. My aim in this project is to study historical relationship between the modern fallibilists and the early modern ones, especially Thomas Reid or George Berkeley and to reveal their resemblance in epistemological structure.

研究分野：哲学

キーワード：認識論　常識哲学　近代哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## １．研究開始当初の背景

これまで申請者は、近代イギリス経験論、およびアメリカのプラグマティズムとイギリス経験論の関係などを中心に研究を行ってきた。特に、イギリス経験論の代表者であるジョージ・バークリを中心とする観念説の研究、そしてバークリやロックとプラグマティズムの類似性に注目し、研究を行ってきた（「これまでに受けた研究費とその成果等の項」を参照）。アメリカを代表する哲学思想であるプラグマティズムは、パトナムやローティについては言うに及ばず、クワインやデイヴィドソンなどにも大きな影響を与え続けている。プラグマティズムの特徴としては、（１）現実における実践性の重視、（２）反基礎付け主義、（３）反懐疑主義、（４）事実と価値の二分法の否定などがあげられる（注 1）。しかし、申請者のこれまでの研究によれば、少なくとも（１）-（３）については、イギリス経験においても、重要な要素となるものであり、（４）についても潜在的に見受けられるものである。

特に、（２）および（３）は、プラグマティストたちによって、いわゆる可謬主義的な考えとともに主張されてきたものであるが、これはわれわれの知識や認識は、つねに何らかの基礎付けられていない（あるいは基礎付けられない）枠組みの中で成り立ち、その枠組みの形成に、いわゆる常識というものが大きく影響しているということを積極的に認める常識哲学的な立場と密接に関係している。例えば、プラグマティズムの祖とされるパースは、スコットランド常識学派の議論に注目しつつ、自らを批判的常識主義と呼んでいるが、スコットランド常識学派の祖であるリードの議論は、イギリス経験論者の中で常識擁護を唱えたロックやバークリの影響を強く受けている。またリードの哲学がのちのムーアに影響を与えていることはしばしば研究者によって指摘されているが、分析哲学に強い影響を与えたムーアの常識擁護の議論は、後期ウィトゲンシュタイン（特に『確実性について』）などにも大きな影響を与えている。さらにカール・ポパーは、しばしばプラグマティズムを批判しつつも、可謬主義をとりつつ、常識に対する強い敬意を表明している（注２）。

このように哲学史を概観すると、常識哲学そして結びついた可謬主義は、いわゆるイギリス経験論やプラグマティズム、あるいは分析哲学といった一般的なカテゴライズを横断した、極めて強い影響力をもった考えであることがわかる。しかし、個々の哲学者間の関係性に注目した研究は散見されるが、哲学史における一つの底流としてこの常識哲学の流れを捉えようとする研究は、極めて少ないのが現状であり、今一度、細部を犠牲にすることなく、なるべく全体的に一つの哲学的思想の流れを描きなおす必要があると考えられる。

（注１）Putnam, *Words and Life*, Harvard University Press, 1995, p. 152.
（注２）Popper, *Conjectures and Refutations*, Routledge, 1963.

## ２．研究の目的

先述したように、常識哲学の歴史的展開を研究することは、多くの時代と哲学者が研究対象に含まれており、一度にすべてを研究対象とすることはできない。しかし、申請者は、これまでにイギリス経験論およびイギリス経験論とプラグマティズムの関係について研究を進めてきた。今回の研究課題も、これまでの研究から発展的に生じてきたものであり、強い関連性を持っている。

そこで、特に、まず常識というものがわれわれの認識においてどれほど大きな役割を果たすものとして考えられていたのかを、バークリとリードの関係を中心に研究を行いつつ、明らかにする。そして、リードと、彼が批判する観念説の代表者であるロックの認識論的構造を対比しつつ、彼らの立場と現代の可謬主義者であるポパーやパースの知識観を比較検討する。パースもポパーも現代の哲学に大きな影響を与えている２０世紀を代表する哲学者であるが、彼らはまたそれぞれ若干違う観点から常識を重視し、リードを高く評価している。

そこでリードの常識哲学と、パースやポパーの哲学を比較検討しながら、どのようにして常識哲学およびそれと結びついた可謬主義が、現代の議論をどのようにして準備したのかを明らかにする。

## ３．研究の方法

前半は、特にイギリス経験論における常識哲学の展開について研究を行う。２０年度以降は、この二年間の研究を発展させ、パースを始めとするプラグマティズム、そしてムーアなど、現代哲学の基礎を築いた哲学において、近代の議論がどのように影響を及ぼしたのか、そして彼らと近代イギリス経験論における差異を検討しながら、常識についての考察がどのようにわれわれの世界観を形成するのかを研究する。

後半は、それまでの研究をもとに、リードにおける常識の果たす役割について考察する。リードは、カントによって、常識に訴えることを激しく批判されたが、リードの常識がどのようなものであるのかは、リード研究においても重要なテーマの一つであり、単純にカントがしたように批判できるものではない。実際にリードは、ロックのように当時の科学の成果を十分に踏まえた上で、いかに懐疑主義を回避できるかということに取り組み、その上で、われわれの認識の構造を形成するものとして、常識という概念を用いている。リード哲学の重要な特徴として、反デカルト主義的な可謬主義があげられるが、彼はもともとバークリ主義者であり、ロックやバークリの影響を強く受けている。このようなリード哲学と、ロックやバークリ哲学の関係に注目しながら、常識あるいはわれわれが既に持っている多くの信念の取り扱いについて、どのような類似性および違いがあるのかということを明らかにする。また前年度に引き続き、内外との研究者と緊密に意見交換を行いながら、研究を進めていく。

## ４．研究成果

２８年度は、常識哲学の代表者であり、スコットランド常識学派の代表者と言われるトマス・リードの認識論的枠組みを検討し、われわれの常識的信念が哲学においてどのような位置付けにあるものとして捉えられるのかということを研究した。リードは外界の直接知覚の理論を提示しているが、それによってわれわれが外界を直接に知覚しており、また外界が実在しているという常識的な信念がたんに確保されるわけではない。むしろ、常識の原理として、外界や他者が実在しているという信念が第一原理として措定されていることが、リード哲学における重要な地位を占めている。しかし、実はリードが懐疑主義に至ると批判している観念説にも、実は同じような構造があることを、特に観念説の代表者であるロックの考えと対比させることによって明らかにした。つまり、ロックは知覚表象説を採用することにより、われわれが外界に直接アクセスすることができないという理論を提示している。そしてこれは、当時、しばしば懐疑主義に

至るものであると考えられた。しかし、当時の科学的なものの考え方をベースに認識論を展開しているロックは、そもそも外界が実在しているということを議論の前提とし、その中で知覚表象説を展開しているのである。そのため、実は、リードとロックは、ともに、外界が存在するということが正当化されるのかどうかということにその認識論を向けているのではなく、その前提の枠内で認識論を展開しているのである。これは、両者が、全面的な懐疑によって認識論を構築しようとしたデカルトとは異なる立場にあり、その点で両者には大きく共通するものがあることを明らかにした。

２９年度は、近代の常識哲学の代表的哲学者であるスコットランドの哲学者トマス・リードの常識についての議論を中心的に研究した。リードは、その主著『人間の知的能力試論』の中で、常識を自明な命題を知る判断能力として位置付け、蓋然的な第一原理と必然的な第一原理を設定し、知識の基礎とした。特に、蓋然的な第一原理に基づく知識観は、デカルトのように同じく第一原理をさだめてそこから知識の体系を構築しようとする哲学者と類似した側面を持ちながら、一方で、その知識観については、大きな変更を行なっている。それは可謬的な知識観である。リードは、常識を自明な知識を理解する判断力として捉え、そこから導き出される命題を第一原理として捉えている。そしてその第一原理と偶然的な第一原理と必然的な第一原理にわけるが、本年度はとくにその中の偶然的な第一原理に注目し、リードのその思想における問題点を詳細に検討した。さらに、上述したように、常識哲学は、しばしばその可謬主義的な知識観と結びつくが、本年度は、リードと同じく常識に強い敬意を払い、可謬主義的な知識観を展開しているカール・ポパーの知識観ととりあげ、リードの可謬主義と対比させた。リードとポパーという二人の哲学者は、同じく可謬主義者でありながら異なる側面を有している。その違いを考察しつつ、上述したリード哲学が持つと考えられる問題点をどのように捉えることができるのかということを明らかにした。

３０年度は、哲学の常識の関係について特に研究を行なった。常識は、とてもさまざまな信念をそこに含んでおり、しばしばその内部においても対立する信念が潜在的に存在しうるものである。そしてそれらを包括的に正しいものとして認めるのか、あるいは一部の常識を特に正しいものとして受け入れるために別の常識的な信念を否定するという選択肢なども考えられる。そのため、常識哲学といっても、常識をあらかじめ知識の基礎として引き受けるのか、あるいは常識を批判的に検討し、常識に新しい考え方をどのようにして取り入れていくのかを取り組むという選択肢もありうる。

このような考え方を出発点として、常識に深くコミットしているとしばしば評価されてきたバークリとリードの哲学において、常識がどのように位置付けられているのかを再検討することで、常識と哲学の関係がどのようなものでありうるのかを考察した。

バークリ自身は、しばしば常識の擁護を主張しながらも、同時に彼の哲学は非常に常識的ではないものとして考えられることがあった。一方、トマス・リードは、自明なものを判断する能力として常識を捉え、その常識をわれわれの知識体系の第一原理に組み込んだ哲学者であり、常識の原理は、我々の知識体系の基礎となるものとして権威を与えられている。このような点から、リードの認識論が基礎付け主義と可謬主義の二つの要素を含んでいるとしばしば指摘されるが、ここにどのような問題点があるのかを指摘し、このようなリードの常識哲学と対比しながら、バークリ的な常識哲学の可能性を明らかにした。

今回の研究は、常識哲学と認識論の可謬主義がどのように展開してきたのかを、歴史的に明らかにすることを目的とした。歴史的な解明を目指したために、基本的な研究の中心は、近代を軸に行った。２８年度は、リードとロックの哲学を比較検討しつつ、その知覚表象説によって懐疑

主義に陥ると批判されたロックの立場と懐疑主義を常識的原理に訴えることによって克服しようとするリードの立場には、大きな類似性があることを確認し、それをデカルトのような立場との違いを鮮明なものにした。２９年度においても、リードの認識論的構造をさらに詳細に検討しつつ、その常識的原理の位置付けを２８年度よりもさらに詳細に検討し、２０世紀を代表する可謬主義者であるカール・ポパーの立場と比較し、その性格の異同などについて考察した。ポパー自身、リードに対する敬意を表明しており、２０世紀後半になるまであまり顧みられなかったとしばしばいわれることのあるリード哲学、そしてその常識哲学・可謬主義の現代への影響を垣間見ることができる。30 年度は、リードとリードに大きな影響を与えたバークリの、哲学における常識の位置付けを対比し、それぞれの可能性について検討した。

前年度までの研究をさらに詳細に再検討し、発展させることを目指し、２０世紀のカール・ポパーや古典的プラグマティストであるパースにおける常識および実在の関係について考察を深めた。特に、それぞれの実在論についての議論を手がかりに、われわれの世界観、知識の体系に、常識がどのように関係しているのかを明らかにしようとした。そしてこの系統が、ジェイムズやネオプラグマティストのローティらへと受け継がれて、強い実在概念への解体へと結びついていることを詳細に検討した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>戸田　剛文 | ４．巻<br>25 |
| ２．論文標題<br>常識哲学者としてのバークリとリード | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>人間存在論 | ６．最初と最後の頁<br>25-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>戸田剛文 | ４．巻<br>24 |
| ２．論文標題<br>二つの可謬主義ーリードとポパー | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>人間存在論 | ６．最初と最後の頁<br>63-75 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>戸田　剛文 | ４．巻<br>1115 |
| ２．論文標題<br>常識哲学あるいは近代のプラグマティスト――ロックとリードの場合―― | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>思想 | ６．最初と最後の頁<br>45-66 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|